南流

茶之湯評林大成　二

432

茶湯評林巻之二目録

生花大要
花の指合
嫌ひ花
祝儀花　胴束の花生
すいせん花手籠
桜一色　丸鉢
かきつはた一色　太鼓鉢
芍薬一色　大籠
白梅一色　中口の花生

さくら桜大島鶏冠草
菊并薄立交大丸ぬくべ
源平桃は一色菊東は大椿
大ぬくは茉莉花二人唐子鉢とと揃鏑花生
蓮は一色九桝
みとり草花おろひ花生
ひらすぎ大船は釣舟
夜顔は花唐人盃
七夕は花百段切は竹の筒
紅梅は水仙二らん筒大小

きんかん冬ゑ花は蹲舟　かんひ縁舟
かいどうは花一色円筒壺白磁瓶
むすひ柳　大束花は他一束切竹は筒
山吹は一色四角釣舟
石竹又曲京石竹曲アま鶏冠草
三重切は竹の筒中ハ三色平舟
かちぎ○は芝大籠
端午は花切ためは深付
かばの一色なうけ籠　門骨は一色ごんぬきと大鉢
白藤は一色大ぬくべ　白梅一束切の筒

菊は三つ足中尾銅花生　ふところ銅の大鉢
未南天は一色丸銅鉢　蛭竹よりる瓢　銅其口花生
竹は一色つる付深付大鉢　石竹は一色銅瓢箪花生
はる瓢箪上下摂花　紅花下一重切
紅梅は一色大かゝべ　大輪菊尺八銅き巾花入
懸花生は瓢
船は花入は瓢

茶湯評林巻之二

生花大要

一凡生花ハ山谷水辺沢地池中野外平地花は其いはれ
自ずから生ずる姿を入生なるを事とす。ハ花生も其いはれを
知れ野花生には広口又胴細又中口又細口又切た先
又手桶又大瓢箪又太鼓筒又懸花生あり一重
切又二重切又三重切又あまり切又寸胴切中口花
入掛け花入筆筒矢筒尺八又長瓢箪振り瓢箪
結び瓢箪はる瓢箪又たるひ焼き青磁焼大
籠重籠昔籠丸籠手付籠桶籠又砂鉢あり

角鉢丸鉢菱鉢さんがう鉢太鼓鉢楕鉢子釣
ぶちあるは太みまるみ角みちいさみ鴨口み瓢箪みなる如此
數多し花も又甚くありといへども花は折の
悪したるハ中高花入や觚花入などは牡丹や芍薬
杜若を生るハかしらはびちひめく花よは柳なとを生る心之又大
筒なとひろき石作やびんひろなとを生る時ハ鉢なるよ花を
のまゝにて花を美しく生て後之たるゝ花のあるは胴束砂鉢
大きみちひハさきに花のあるは小ぶみ山形をも不用也変動無常
此心を能得らて上手らといふ一筋に心得るものを人をかねるハ云
一 是度の格は書と心截るハなりや偏へなりげに於いて事見ハ

紅代は逆代なる事しかの心をいふ花を生るものハいかほどを
作ハるべし夜よ一つは花を生て花を生るハ師匠とかく
まる道らば山谷水辺池中は花をとくとみんべし風
おもとよ雨よもとより土中よりおのが流れ
生ずる処のかならず別師匠あるべし其若しし
嫌より道路をあらくよ池は蓮の泥は中より生ずるべく
とあらく夫ハひき又ついて太よひきまき葉の開き
葉大葉小葉立まじりくる姿ありも不調或時ハ未
開紅はまひらきたるまでくハ香うしく紅を深くる桜よ
色紹みゝ自もいやしり紅やり又白躑躅は大るゝ牡

まところくなりこけるへくをらくなり本三輪は紅霜き
つかさ一秋くよもしつらく様たるハ色を識は師匠なと
行末をとらへしる色を思へハたかいかめあきらへを遣ひ
まる花の立縁を付る理りにかる花をわがものハかつてん
ふ律儀の角に花のちらかは其かごとくに生かるへし
生花ともニ字に心を付るへしもまつれ花の生々
あるべし学ふに此一心をいふとも世論に乱を好ハ自
花道に叶べし
一或時吉方へ居士の所を訪入く問て曰く
あつらしは和尚ハ諸事頼とおもりけるとかる由へ

此方花寄合・儀会なとちくあるハ書院の飾ハ何となく花ハ分
其中に立花を心がくる人ハ之等に紅白へと両目利きと
住吉の飾り銅の花入に水仙の葉をたゝみ生れ心々自
まんを生けおよきん生花を三輪生けし和尚に一度
あるくあめ千家の珍毛人にもあめ申し一度ならず
かくれ人ハ今ハ来る花ハ出来かくること同し故なり
ハ生けかりし同し人ハ残りてきくとろしきの
またり識者へと程しまく答花ハぬけかると
一竹節之内一大あるきハ良しとも此は是ハ水仙の
花もさくらき時節之去ごとも求むるに安し花無葉

をいけるハぬけくゞし節しんハ底ゆくハ花のうへへつと挿る也

一今世の花ハ無之けれ三色を生るハふる流儀之無とも此宮

ならへ之必秘事べしくと分をし知の世にも書おく

花の揃合

一とろうぜん　紙合の枝　宿の心　弓矢の枝　十文字

手ひをかいそる枝　ひらきの枝　三つ花　乱れかへり

花生む草の枝　切ちがへ（此花切ハ今ハ生ヅ）

嫌ひ花

一茶の花　萩　萩　きんせん花　けいとう花　仙翁花

女郎花　ゆりうや　大手毬花　花めぐさ　三こまくの花

くやまきこと

一亭主の花ハ床の内客居の角角柱へ寄べし

一客の花ハ勝手の方の床の角柱へ寄るべし

一一花一葉と云ハ一花一葉花六葉と生ると置ニ生花

葉をふす　葉なき花をふす　是又嫌ひ也　然とも

時節の花葉なき事あるハちと苦しからず

一角薄板の床ハおもてへゆり出てあるを広小床ハ八ナ八メ

一丸薄板の床ハ八ナ八メ小床ハ八ナこめる事之

一生花をいける時花鋏長サ前大幅をもて生なけれとよ

してよそはずをはくゆきてとるまにしめかくれりもとも

右ノ花を入て持ある内へ入物ハ水次さハり焼物
ク花切物も何にもよく付之南蛮なとの鉢を用る
切ものひ又ハ蒔絵物水を一所に活る
一萬の花ハ座敷ともにたひまするにハ正花にする
又雑花を生るも新宅なとにあらハくハしくまし花も本
正花にする之
一口切の此花ハあしき花をきらふ大花字を忌也
一宿の此花とも八大花をまへてを立尺盛九尺盛
一床の此花を居る事ハ数寄屋古図のごとく出る事
すへし

てつせんハつるを手あり
てん然(ぜん)とまとハせ

右花(ハな)ハ桜(さくら)一色(いろ)ニテ立へし
又桜を取合(とりあハせ)立る事もある
水ハ中へ二三分
ころす也

かきつばたと一色(しき)なり
いれる鉢(はち)此中(なか)に姿
一かぶつゝにて一
かぶを分生(はけいり)る
見合
挙動(きよどう)此
あらしと云

太鼓鉢(たいこばち)

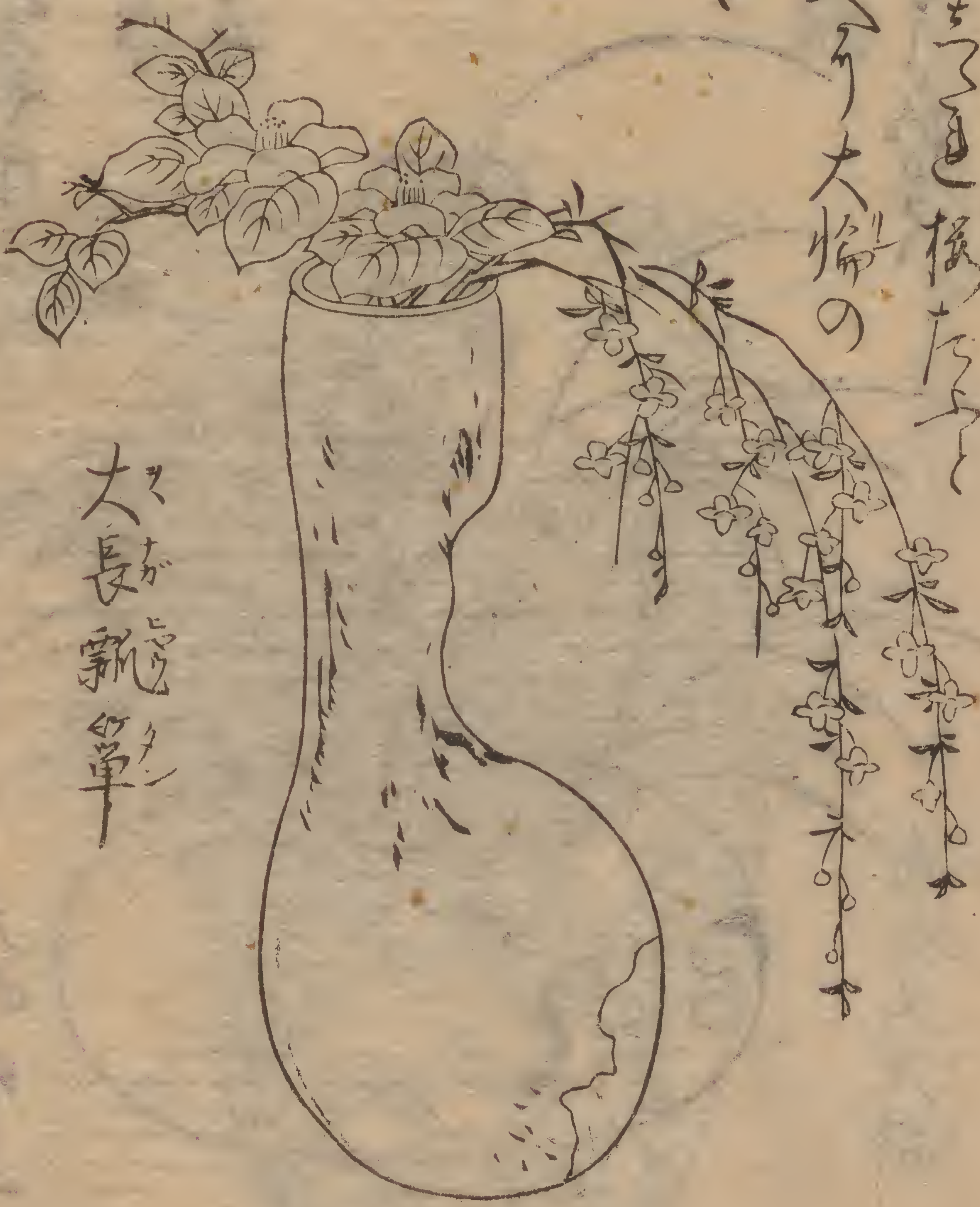
芍薬(しやくやく)を石榴(りん)色々と
こゝろ合くせる籠(かご)此中
一もとひかりそる
種(たね)多り
もげ地
そうちへ
入あくまでを
続くそそとを
べし

大籠(たかご)

梅ハ一色枝ハ
かほとひつる
ちと出べし

中口鉢生

長枝ハちて重桜たてゝ
外ひくく大輪の
つばき



大長瓢箪

大輪にさや中
菊よろしき
花を入ませ

いく露をとも拾て

大丸めかべ

とられたる
世話好かし
源平桃

南京の大桶

大ぬく此茶湯如此すく

福寿草(フクジユサウ)

三人唐子鉢もち上ル銅

蓮(ハス)ハ一色(シキ)おハ赤く
葉(ハ)ハ大(タイ)蕾(ミ)は露(ツユ)
何も口伝

九鉢(ハチ)

冬至ノ花之
口伝

大船

ひらつきとハ此心持なり
下りたる花ハかかち此心

夜話の花口傳

年ニ時ニ花一二輪ニ
水中より溺く

七夕の花口傳

行く吋り

二かん筒ならべて
水仙
紅梅

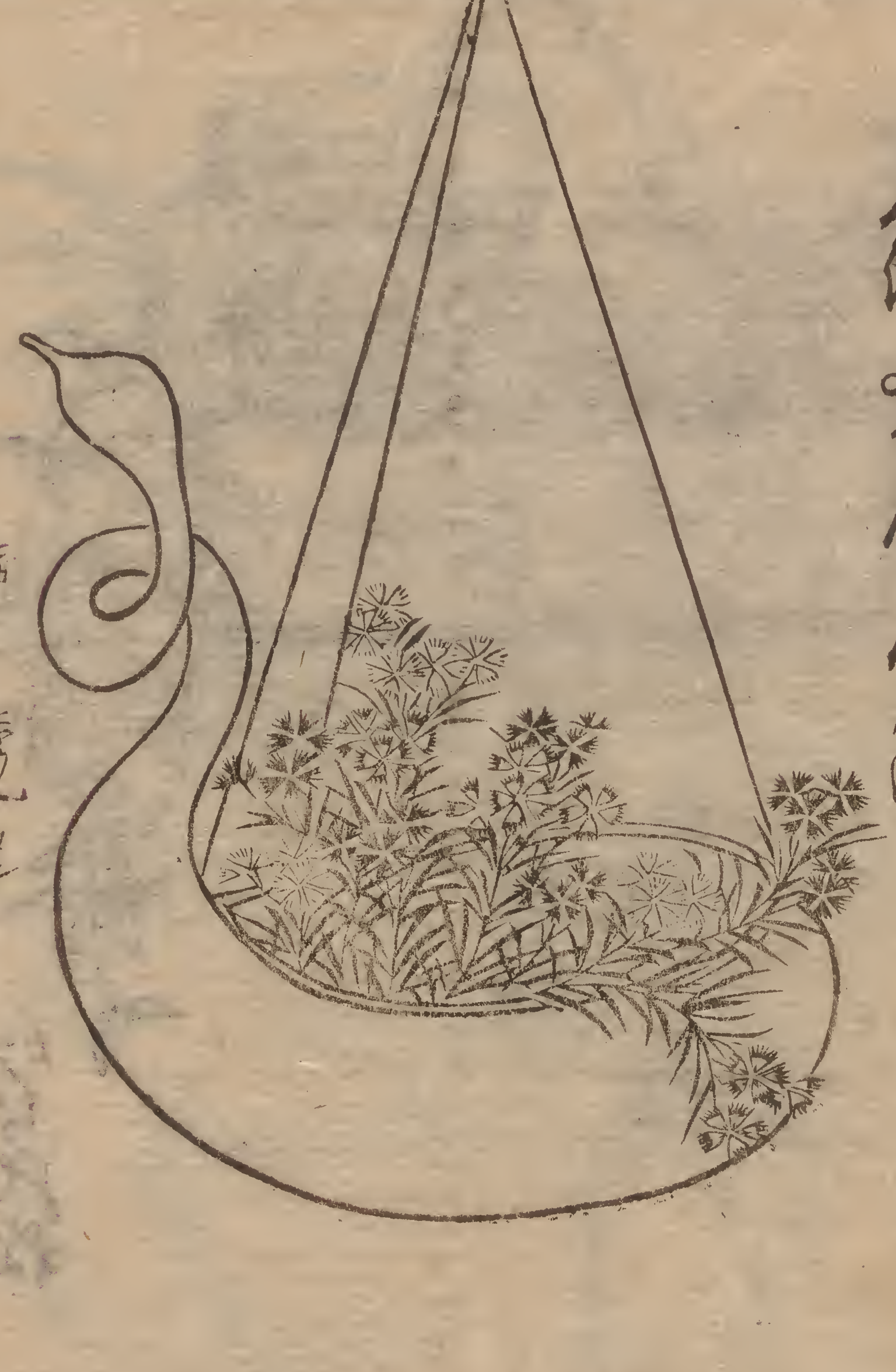
きんかん
鴨の舟

がんひ
縁子舟

白砂盆
同伊予舟

むすび柳 一大事口伝有
水仙

かづら枝
釣舟
らん花入一色


石竹又らんきん石竹
曲里瓢箪

三ッ重切花竹花筒
桃

さゆり
姫ゆり
鬼ゆり

平女

をちあれ一色
麦のらぎ

大翁

花菖蒲(しやうぶ)
菖蒲ト入交(イレマゼ)

瑞年花只傳

切たゐ此染付

がま此一色

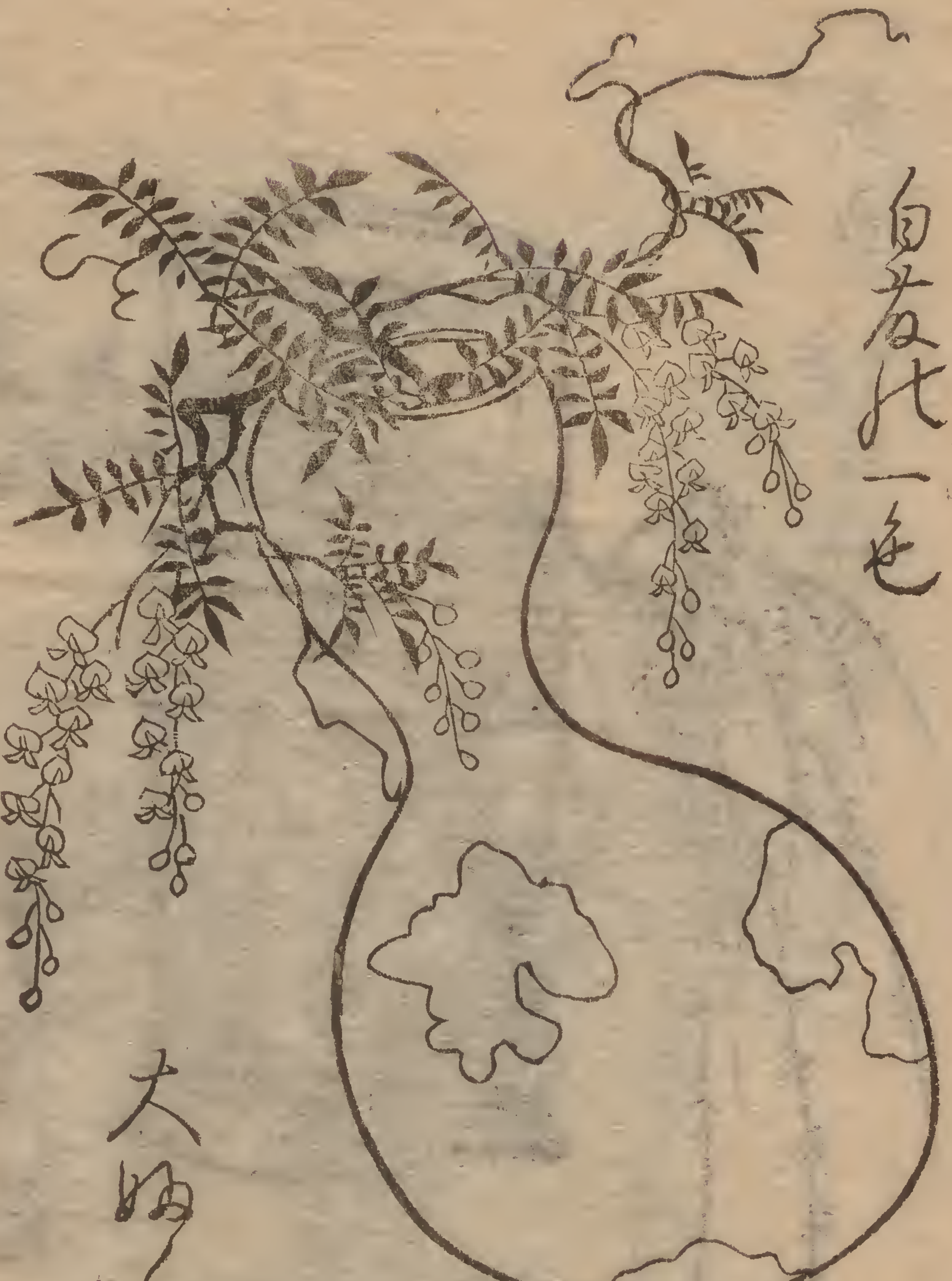
ひろけ籠(かご)

川骨(カウホ子)は一色(こしき)此花生(イク)るに大事をつたゆる
花を一輪(リン)水(ミヅ)は中(ナカ)にて生(イケ)べし

染付どんぶり鉢も大鉢

白藤は一色

花はちらかきを生る



大ふくべ

白梅

一重切花筒

大白 紅と薄色と三本

中口は銅花生

さし南天大札
一本
丸銅鉢

花ハ白ク二朶
此外ニ有リ
銅ノ大さら

ささくあり
竹八およ
大竹八ほよ

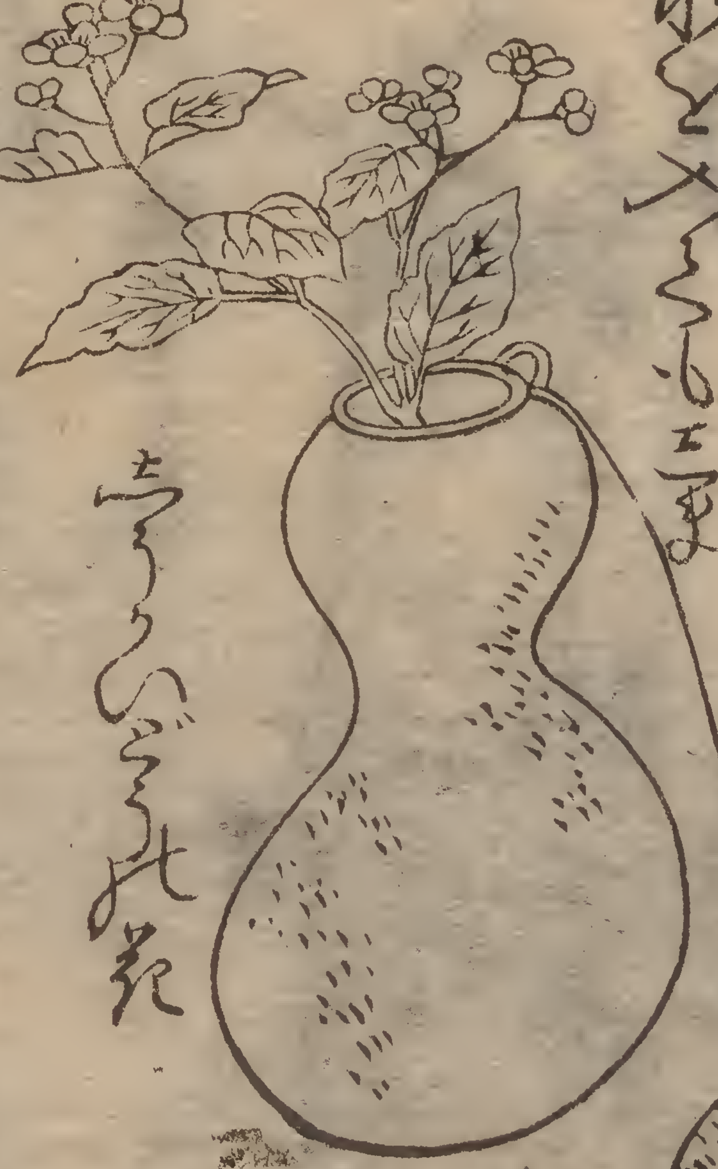
つる付染付大鉢

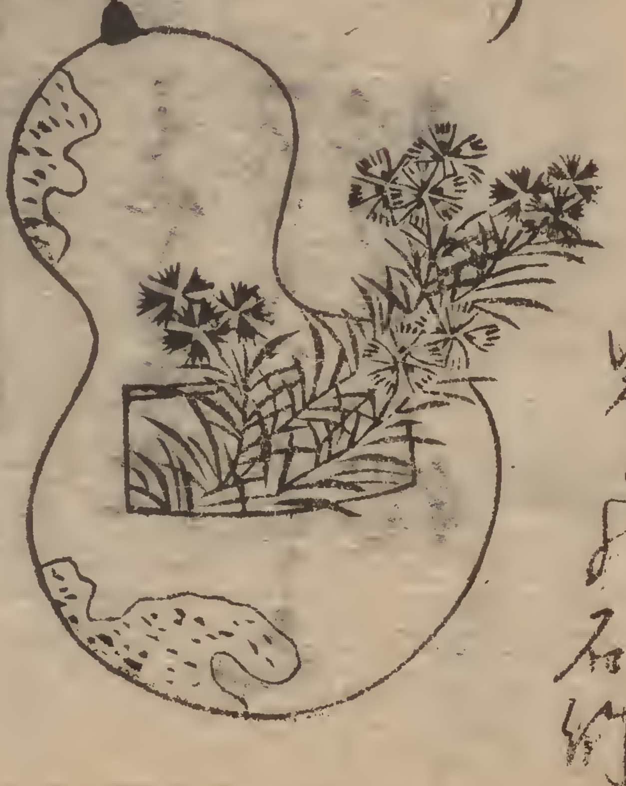
かま竹りひる咲

銅耳口花生

色々石竹花色

ける瓢箪掛路と云つるも
らんしかけ上下に花を
出るといふたんの掛路を切
やきやとろしめくいふを
水をかへしによし
ぎうていすべし吹ば何もろくよろしべし





名ごりの
梅とゞめて

うやぶまれ
つばきを色
ボンアミ
新口の綱

かうらいは此梅しるをはらするをた婦と

立蛇

名を此古梅く

懸花生の習

一懸花入ハさし口の枝ハ下へ下へさがる事を数流也然ど
へ（とはず）ハ何方も下くも不苦花ハ床縁が過さる
ほど大花を籠にも大筒にも生る時ハ筒の中
へ水をも小石にても又ハおもりを入べし尤ならば
ハ花かつぎなく生るべし

一懸花入の水ハ手に手をきらふ竹ハ小口を水ぬくぬ
らし絶之籠瓢簞などハかしこ水づゝをよく仕るべし

一懸花生の釘ハ床の地より二尺八寸上に打
ならゝを打べし又釘の打どころハ数寄屋囲の法式

大輪の菊生し

銅古巾着の花入

あるハ大船九尺斗りの座敷ハ四尺八寸程也へし其ハも座敷
どのたつみ生べきと思ふ時ハ四尺八寸ほどもよかるべし 二
くもん節ともあるべかりる時ハらうそくを擲かへすべし
一たかる座敷などもおへも脇へも長くとおもひ合ハいよ重
ると入て持たるといへども窮あまりより来てて花かくりみい
花生かつるり之つる生爻事何ともし時は数よ器取に
上へ釣事之風吹なるよハ必花かつるり損る事何ともなき敷
釣揚よまるもまる次第之
一まいゝたちをかけて花を生る事何ぞに起して生ハるべ次
かゝらく陰ゞ守之唐紙よ水ほつよふ事を忌申へ之

舟の花入の事

一舟の花ハ四月十五日より八月中生るもの也其外ハ
釜も然ども活よしても生ると雖も子細ハ大船の
時分ハ舟の舳の筈之小船ハ一年中活かくし又外国なるへし
みなも大船の往来の通ひに然ハ時に定めハなる
一舟の花ハ舟ハ四月より出舟の時ハ入舟と生るもの也かけ様ハ
いつくも一筋の鎖を窮めにつりかけるべし花の出舟の時
はなうつと口伝あるもとこにも水を入之
一たかるふねハなかくもたかる花遣べし右の心肝
要之

一浮(ウキ)舟(フネ)ハ真中(シンナカ)と大事(ダイジ)に生(イク)る事あしらひく手舟(テフネ)入(イリ)舟にて
心を持(モリ)ちる事
一浮(ウキ)舟(フネ)ハ下(シタ)に浮(ウキ)てるハ何れも足(アシ)此ひらき卓(ショク)ら花台(クハタイ)の
おくべし花をいくハ花(ハナ)も絶へん候る也口傳